

中国人から見た日本語の発想と表現 I - 「なる」という表現について -

Japanese Ways of Thought and Expression from a Chinese Point of View - On a Japanese Word “Naru” -

任 佳 韞†

Ren Jiayun

Abstract This paper deals with Japanese ways of thought and expression, and how they are seen from a Chinese point of view. Especially a Japanese word “naru” is discussed in this paper. An intransitive verb “naru” is a typical Japanese language. Such a verb cannot be found in the Chinese language. Japanese people like to express their deeds as what they are forced to do, and use the word “naru.” It is difficult for Chinese people to understand such a way of thought. Why do they express what they decide to do as what they are forced to do or what they come to do by the power of nature or something beyond their powers? But it is important to understand such a Japanese way of thought in order to communicate with Japanese people. It is not good for a Chinese people to try to understand Japanese ways of thought and expression according to Chinese ways of thought and expression.

1. はじめに

日本語を母国語としない外国人の日本語学習者にとって、理解するのが難しいのが、日本語の自動詞と他動詞の区別である。文の中で自動詞を使うべきか、他動詞を使うべきか、勿論動詞自体のもつ意味にかかわるが、そればかりでなく、会話の場面や言語習慣などにも関係があるわけだから、外国人の日本語学習者にとっては、一層問題が複雑化してしまう。

本稿では、中国語との比較を通じて、日本語の自動詞、特に「なる」という表現について、その特色を考えてみることにしたい。

2. 中国語の動詞の分類

日本語の他動詞は、「動詞の動作や作用を、他に対するはたらきかけ、または他をつくり出すはたらきとして表わすもの」¹⁾と説明されている。これに対応する中国語として考えられるものに「及物動詞」があるが、単純に一致するとは言えない。

中国語の動詞は通常、ものを対象とするか否かを基準にして、「及物動詞」と「不及物動詞」の二つのカテゴリーに分ける。物を対象とするのが及物動詞であり、「看书（本を読む）」の「看」のような動詞はもちろん、「去公司（会社に行く）」の「去」、「坐电车（電車に乗る）」の「坐」、「下雨（雨が降る）」の「下」なども、及物動詞である。

† 東南大学（南京市）

これに対し、日本語では、「本を読む」の「読む」は他動詞であるが、「会社に行く」の「行く」、「電車に乗る」の「乗る」、そして「雨が降る」の「降る」は自動詞である。

一方、日本語の自動詞は、「動詞の動作や作用を、それ自身のはたらきとして表わす動詞」²⁾であり、中国語でこれに対応すると考えられるのが、「不及物動詞」である。不及物動詞は、ものを対象にしない、受身にならないという特徴をもっている。そしてその数は非常に少ない。日本語の自動詞の「開く」という動詞は、「ドアが開く」という言い方をするが、他動詞としても「ドアを開ける」という言い方が可能である。これに対応する中国語は、「门开了」(ドアが開いた)「开门」(ドアを開ける)となる。日本語の「開く」「開ける」という語形の相違が中国語にはない。「開く」と「開ける」は、同じ「开」という動詞を使うのである。自動詞と不及物動詞は、完全に一致するものではない。

3. 「する」言語としての中国語

中国語の語順は、英語の基本語順と同じで、主語が最初に来て、述語動詞、目的語の順になる。主語が明確な言語である。

我 吃 面包 (私はパンを食べる)

中国語の動詞には、英語の現在形、過去形、未来形のような時制(テンス)を示す語形変化はなく、日本語の動詞の活用形、未然形、連体形、終止形のような活用形もない。

日本語の自動詞にあたる動詞の使用は次のような表現となる。

河 注入 海 (河が海に注入する=注ぐ)

门 开了 (ドアが開いた)

しかし「下雨」(雨が降る)のような表現もあり、語順がすべてとは言えないが、動詞の後に名詞が来た場合、その動詞は他動詞である場合が多い。基本的に、英語と同じく、中国語は<主語+他動詞+目的語>によってなりたつ言語である。「～は～を～する」言語なのである。「～は～になる」という言語ではない。

4. 日本語の「～になる」表現と中国語

日本語の「～になる」という表現は、もっとも日本語らしい表現である。それは、日本人の発想が如実に出た表現である。池上嘉彦は、「表現構造の比較 - <スル>的な言語と<ナル>的な言語 -」において、英語表現と日本語表現を比較し、英語は動作主が強い支配力を有するものであるのに対し、日本語は必ずしもそうではないと述べている。³⁾英語は動作主が特権的な位置に置かれるのに対し、日本語はそれを目立たなくしてしまう。その特性を「希薄化」してしまうのである。

池上は以下のような例をあげている。

天皇陛下ニオカセラレマシテハ、自ラ木ノ苗ヲオ植エニナリマシタ。

ここでの動作主は、「天皇陛下」である。英語表現であれば、主語は「天皇陛下」である。日本語で訳して言えば、「天皇陛下は木を植えた」というのがその行為の端的表現である。しかし日本語では、「～は」という英語ならば主語にあたるものは、「主題」である。「日本語の構文での<主題>は、ある出来事が起こる<場所>を設定するという機能がある」のである。それがここで端的に表現されて、「天皇陛下ニオカセラレマシテハ」という表現になっている。

「天皇陛下」は場所となって、動作主としての特性を取り去られている。「希薄化」されている。動作主としての個性は消えている。そこにあるのは、「自ラ」という語がもつ、もう一つの意味、「自分で」という動作主の個性を強く表現する意味ではなく、「おのずから」というもっとも日本人らしい発想に基づいた意味が示す、個性を越えた、個性を包み込んだ大いなる自然の働きである。

動作主が個性を失い、場所となり、そこで自然の働きが営まれる。動作主も自然と一体化した様相を呈し、「自然のなりゆき」として表現される。それは、自分で決めたことについても、言えるのである。たとえば、次のような表現がある。

このたび結婚することになりました。

結婚といえば、現代では、自由意志によるものであらうと思われる。しかし自分で決め、自分の意志で結婚するにもかかわらず、そういう表現となるのである。この表現では、かつてあったように、本人の意思に関係なく、結婚がとりおこなわれたとも解釈できる。自分の意志で

結婚するのであれば、「結婚します」という表現がいい。しかし「このたび」と書くと、形式的になることもあって、「結婚します」でなく、「結婚することになりました」という表現になる。自然の営みも人間の意志を越えたものとして働きかける。その働きのなかにある自分たちという発想をしたいのが日本人なのである。

このたび職員一同の懇親会を開くことになりました。

この表現も同じである。だれかの発案があったのであろうが、そのだれかは消えてしまい、われわれの、自然の行為になるのである。このような表現に至る前には、できるだけ、発案者の個性が消えるような話し合いなり、根回しが行なわれている。それがこのような表現になったと言える。単なる表現上のことではなく、日本人の発想に、行為にそのようなものがあり、それが、結局、表現に行き着くのである。

この点が外国人には理解し難い。なぜ、自分で決めたことなのに、「～になりました」と言うのか。自分の意志で何かを執り行うことに決めたのに、「～になった」と表現するのは、いかにも自分の意志と関係なく、なりゆきでそうならざるを得なくなったかのようで、どう考えてみても納得できないのである。

中国語では、「～になる」という表現は見つからない。日本語の「このたび職員一同の懇親会を開くことになりました」は、あえて言えば、主語なしで、「現決定召开

全体员工联谊会」(このたび職員一同の懇親会を開くことにしました)となる。「なりました」という表現にはならない。「このたび職員一同の懇親会を開くことになりました」という日本語表現を中国語にすれば、「我们决

定召开全体员工联谊会」となる。両者は、主語があるか、ないかの相違であり、「なりました」に相当する表現は、中国語にないのである。

森田良行は、中国人と日本人の表現の違いの例として次のような例をあげている。⁴⁾

中国人の見舞い客は、病人を慰めるのに、次のように言う。

やあ、顔色がよくないね。会社のことは私たちがちゃんとやっているから、安心してゆっくり休み給え！

日本人の場合、まず「顔色がよくないね」と言われれば、言われた病人にはひどく応える。自分の体調がよくないと思う。それに続けて、会社のことは自分たちでやるから、君がいなくても大丈夫だと言われると、さらに応える。自分は不要な人間になってしまったのかと思う。このようなことを言われた日本人は、病状を悪化させるであろう。

しかし中国人にとっては、これが当たり前の表現で、これで病人が落ち込むことはない。見舞い客が言っていることは、客観的事実である。

このような中国人の発想と表現に対し、日本人ならどう言うか。病人を励まし、元気づけるために次のような表現になる。

やあ、思ったより元気そうじゃないか。君が入院したと聞いて心配していたんだ。それに君が休んでいると仕事はどこおって、皆、困っているんだよ。早くよくなって僕たちを安心させてくれ給え！

病人の顔色が悪くても、そのまま客観的に言わない。病人が会社を休んでいることで、自分たちも困っていると言う。自分たちも被害者だと言うのである。病人が病気になるのは、大いなる自然の働きであり、病人にはどうしようもなかった。病人は被害者である。その立場と見舞い客も同じ立場にあることで、病人を元気づけるのである。

ここには、日本人が被害者的立場を好むことが現れている。日本人は根本的に受身なのである。そして周囲の社会に依存し、個性が周囲より浮き立つことを好まない性格が現れている。先に述べた、動作主としての個性を「希薄化」させることを好むのである。

よく日本人の挨拶は、言い訳から始まると言われる。開会の挨拶などに、自分などはここで挨拶をする資格はないのだが、頼まれ、断りきれずに挨拶するのでであると延々と言い訳を続ける。聴衆も言い訳を聞いて、安心する傾向がある。周囲から飛びぬけた個性が出るのを互いに好まないのである。

5. 丁寧な表現としての「～になる」

佐藤琢三は、日本人が「です」で済むところを「なります」と言う場合の「なる」表現を、「对人的行為のナル」と呼んでいる。そして「对人的行為の表現としての特徴」を「非個人的なもの」であり、「聞き手に対してごく丁寧でやわらかい発話」としている。さらに「对人的行為の意味・機能のメカニズム」として、「ナルの主

体の背景化の機能が話者の発話行為を背景化し、対人的な発話の直接性が軽減され、これによって丁寧さ(やわらかさ)を生じさせる」としている。⁵⁾

例として、次のような表現がある。

申し訳ありませんが、お化粧室は上のフロアになります。

この商品は 1 万円になります。

日本人の好む、動作主としての主体の「希薄化」という要素が、「丁寧さ」というプラスの要素をもつようになっている。それは「自らが帰属する社会組織の立場として発話する状況」であり、いわば、組織の代表として、組織を背負って対応するのである。個人対個人の関係ではなく、客という個人に対し、組織全体が対応するのである。

「お化粧室は上のフロアになります」という表現では、「お化粧室が上のフロアにある」ということを伝える個人は、背景と化し、目立たなくなる。そうすることで、対人的発話の直接性が軽減され、聞き手に対し、「丁寧さとやわらかさ」を生じさせている。

「この商品は 1 万円になります」という表現も、「この商品は 1 万円です」と断定辞「だ」の丁寧形を用いて発話すると、話者は自己を隠すことなく聞き手と対峙し、直接的に発話内容を伝えることになる。これに対し、「この商品は 1 万円になります」という表現は、よりやわらかい印象を与える。意識的な断定表現「です」と比べると、「～になります」という表現は非意識的で、発話行為を非個人的なものにし、話者と聞き手の対立を目立たなくしている。「～になる」表現に伴った、動作主の個性の「希薄化」が、プラスの効果を持っているのである。

一方、中国語には、「～になります」という表現に対応するものは見当たらない。「～になります」という表現は、一種の敬語表現である。もともと敬語が発達している日本語と比べて、中国語は人称代名詞の尊称や敬意を表わす言い回しはあるが、日本語のような独立した系統をもつ文法や敬語理論を有しない。もっとも敬語が要求されるサービス業界において、独特の接客用語をもっている日本語と違い、中国語には十分なものが無い。中国語では、自分の所属する職場の仲間に対しても、顧客に対しても、ほとんど同じ言葉を発することが多い。

中国語では、「お化粧室は上のフロアです」という表現も、「お化粧室は上のフロアになります」という表現

も、「洗手间在楼上」(化粧室は上のフロアにあります)にしかならない。強いて「お化粧室は上のフロアになります」という表現を、日本語のニュアンスに合わせ中国語に訳せば、「我们这里洗手间在楼上」(私たちの店ではお化粧室は上のフロアにあります)になるであろう。即ち、「私たちの店では」と言って、背後にある組織の名を挙げることで、個人としての話者の存在を背景化し、話者と聞き手の対立を見えなくするのである。

しかし日本語のように聞き手に対して「丁寧さ」が生じているであろうか。確かに話者と聞き手の対峙関係が薄くなったものの、「私たちの店」という組織との新しい対立関係が押し出され、丁寧どころか、威張っている姿勢さえ感じ取られこともあるかもしれない。

「我们这里洗手间在楼上」というと、結局、「私たちはお化粧室を上のフロアにしています」という表現と同じような語感を持ち、日本語の「お化粧室は上のフロアになります」という表現の発想と違うのである。

6. おわりに

「～になる」と「～になります」という表現について、中国語と比較しながら、述べてきた。それらの表現と完全に一致する中国語はない。中国語がないということは、中国人にそのような発想がないということである。「～になる」という表現や「～になります」という表現は、中国人には困難である。どうしても自分たちの発想や持っている言葉で表現してしまったり、意味を解釈したりしてしまう。自分の母国語の干渉を受けてしまうのである。それを極力避けて、日本人の発想や日本語の性格を理解する努力を怠ってはならないと思われる。

本稿作成中、森豪先生から貴重なご意見をいただき、詳しい資料まで提供していただいた。さらに、本稿が出来上がってから、文字から文章の構成まで大いなるご指導をいただいた。ここに、先生のご指導に対し、心から謝意を表したい。

註

- 1) 永山 勇: 国文法の基礎, p. 104, 洛陽社, 東京, 2004.
- 2) 前掲書
- 3) 池上嘉彦: 表現講座の比較 - <スル> 的な言語と <ナル> 的な言語 -, 日英語比較講座第 4 巻所収, pp. 100 - 103. 大修館, 東京, 1983.

- 4) 森田良行: 日本人の発想、日本語の表現, pp. 132
- 134. 中央公論社, 東京, 1998.
- 5) 佐藤琢三: 自動詞文と他動詞文の意味論, pp. 29
- 33. 笠間書院, 東京, 2005.

参考文献

- 森田良行: 日本語文法の発想, ひつじ書房, 東京, 2002.
村木新次郎: 日本語動詞の諸相, ひつじ書房, 東京, 1996.

(受理 平成 19 年 3 月 19 日)